教育課程実践モデル事業 EAST通信 第17号（H30.4.23）松江東高等学校

教育課程実践モデル事業も、平成３０年度が２年次最終年となります。そのため、４月１１日の職員会議で、今年度の取り組みについて説明する機会を設けました。

本校では、この事業を通じて育てたい生徒像を「生徒同士でお互いに質問し合うような力を身につけ、対話的な学びによって理解が深まり、そうした良い意見を主体的に考え、活動できる力を備えた生徒」としています。

平成２９年度には、この具体的生徒像達成のため、国語と数学においては論理的思考力、英語においては批判的思考力が養われていく取り組みを通じた授業改善をおこないました。成果の検証としては、研究授業の前後等にアンケートを実施してその分析を行いました。また、ペーパーテストによる学力の伸長度の測定（定期試験、校内実力テスト、模試の比較、英語においてはG-TECも詳細に分析）、生徒の自己評価の分析等も実施しました。

平成３０年度には、アンケートの内容等は見直す予定ですが、初年度の検証方法等も継続して行います。あわせて、ルーブリック評価による成果の検証方法も検討し、より効果的な方法により検証を試みる予定です。なによりも、初年度に英数国を中心として培ってきた実践を他教科にも広げ、学校全体としての取り組みを深めることを第一義とします。

以下は、職員会議資料の抜粋です。

平成３０年度「教育課程実践モデル事業」実施計画について

１　「教育課程実践モデル事業」について

（1）趣旨

学校の教育目標の達成に資するとともに次期学習指導要領を見据えて学習者の主体的・能動的な学びを進めるために、高等学校における授業、評価及びカリキュラム設計のあり方等を研究し、学習指導の改善・充実を図る。

（2）本事業でめざす具体的生徒像

「生徒同士でお互いに質問し合うような力を身につけ、対話的な学びによって理解が深まり、そうした良い意見を主体的に考え、活動できる力を備えた生徒」

（3）研究担当者　　◎印がリーダー

森本　久美子（国語）
伊藤　尚史（地歴・公民）→新担当者、教科主任会と連携
手錢　隆志（数学）
◎竹田　育子（英語）
鎌田　哲成（英語）

（4）運営指導委員

関西大学教育推進部教授　森　朋子
岡山大学教師教育開発センター教授　高旗　浩志
島根大学教育学部言語教育専攻英語教育コース准教授　猫田　英伸
島根大学教育学部数理基礎講座准教授　御園　真史
松江市立第二中学校長　飯国　弘巳（新規）

２　平成３０年度の展開

（1）方向性

１年目は主に英語・数学・国語の３教科を中心として実践を進めてきたが、今年度はすべての教科において取り組みを深め、学校全体として学習指導の改善・充実を図る。

（2）研究主題

「これからの社会において自立した主体的な学習者を育てるために」
～次期学習指導要領に向けた授業改善と新テストへの対応を通して～

（3）組織図

「教育課程実践モデル事業」研究担当者会　※毎週月曜日３限開催

森本　伊藤尚　手銭　竹田　鎌田

↓　**企画立案し、提案・提言を行う**

教科主任会　⇔　教務部

↓

各教科会

各教科に教育課程実践モデル事業の担当者１名を置く（教科主任が兼務も可）

☆必要に応じて拡大教育課程実践モデル事業担当者会を開催

（4）今年度の計画（概略）

①運営指導員委員会と研究授業の開催

７月　第１回運営指導委員会の実施

研究担当者による研究授業

公開授業週間　どちらかの時期で各教員が１回は公開授業を実施（*略案）

１０月　公開授業週間　※運営指導委員による指導を随時実施

１２月　第２回運営指導委員会の実施

各教科担当者による研究授業

３学期　成果報告会

②校外研修への派遣

③校内研修の開催

④本事業でめざす具体的生徒像に沿ったルーブリックの作成

こうした実践のなかで、④と関連して、授業評価の改善、最終的には学習成績の評価の改善や平成32年度入学生の教育課程の検討も行っていくことを確認した。

【コラム】

『「協働の学び」が変えた学校：新座高校 学校改革の10年』という本が大月書店から３月に出版されました。対話と協働の学習により、すべての生徒の学びを保障し、「特別支援の視点」で多様な生徒をケアする学校へと変わった新座高校の実践、と本の紹介ではされています。この本には『学びをつむぐ』という前著があるのですが、それは金子先生が新座高校に着任された年の１年間の記録でした。今回の本は、そこから 10 年をへて、協働学習が学校全体の文化になっていった過程を、多数の先生方の視点で描いた本となっているようです。。

新座高校のホームページを見てみると、「授業研究プロジェクト」というサイトがあり、そこには「授業研究会ニュース」がＵＰされていました。「ＥＡＳＴ通信」の参考になればと、いくつかの号を見てみました。注目したのが、授業研究プロジェクト委員会が策定した、授業研究の基本方針です。以下にその基本方針を紹介します。

＜授業研究ねらい＞

1　教師が互いに学び合う職場づくりのために行う。

2　全ての生徒が参加できる授業をつくるために行う。

＜授業研究の原則＞

1　課題意識を持って主体的に参加する。

2　いろいろな種類の授業を発見する。

3　生徒を様々な角度からとらえる。

4　授業内の生徒の様子を語り合い、その背景・原因について意見交換する。

松江東高校でも、授業における「７の視点」として、①安心感のもてる授業②口頭での説明（指示の出し方）の工夫③板書の工夫④集団を意識した取組⑤自己肯定感を持たせる取組⑥言語活動の充実⑦考えさせる取組･･･というのをあげています。今一度、授業研究を何のためにするか、学校全体で考え、この視点が授業改善により生かさせるようにしていかないといけないと思いました。